

特251

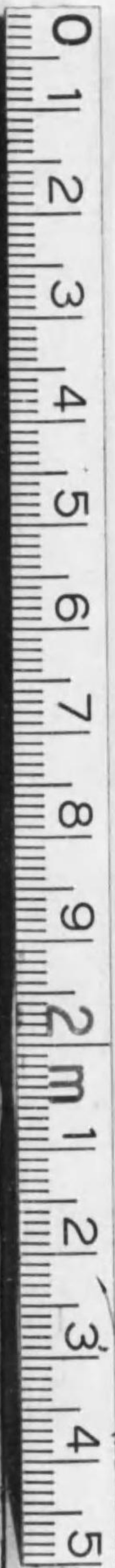
825



第十篇

個人的存在の彼方

心靈科學研究會



始



特251
825



淺野和三郎編

個人的存在の彼方



發行所 心霊科學研究會

はしがき

カムミンス嬢を通じて送られたマイヤースの通信『永遠の大道』は、近代心靈學界の偉大なる收穫の一つであること、讀者に於て充分御承知のことと思はれるが、若し未だこれに接しない方々があるなら、この際是非一讀をお薦めしたい。あれ丈でも精讀して居れば、現代の日本國を席卷しつゝある不健全思想、又は幼稚な迷信等には感染せず済むであらう。

その後、カムミンス嬢の自動書記能力は、ますます／＼牙えを加へ、今回前者の續篇と見るべき新刊に接した。題して『個人的存在の彼方』といふ。その内容は三部に分れ、第一部に於ては主として死の直後の生活を取扱ひ、第二部に於ては、マイヤースの所謂個人的存在の彼方——彼岸の上層生活を取扱ひ、第三部に於ては、祈禱、感謝、その他思想上、信仰上の實際問題に就きての意見を述べ、更に附録として自然靈、動物靈、その他に就きての見解が述べられて居る。總計二三〇頁、先づ手頃の書物である。

本書の第一部は、さして感服できない。時として卓見にも接するが、時にはそれほどでもない箇所もあり、概して叙述が蕪雜に流れて居る。他日機會があつたら、その中の出色の箇所を拾ひ出して紹介してもよいが、今回はしばらくこれを省いて置く。

本書の歴史は何と言つても第二部で、私はこれを一讀した時に、覺えず案を拍つて歡聲を發した。何となれば、私が多年幽明交通によつて、調査研究をすゝめてゐたところが、はしなくもマイヤースの通信と、多くの一致點を發見したからである。私としては、心から百年の知己の感に堪へない。

最近八十年間、歐米人の手で受取られた靈界通信は、何百と數へられる。が、こゝまで深入りして、こゝまで内觀的飛躍を遂げたものは、他に類例を見ない。私はできる限り忠實にこれを紹介し、そして必要あれば、卑見を加へて見たいと思ふ。

第三部の文字もなか／＼すぐれて居る。ロツジ卿などは、特にその中の「祈禱」と題せる一章を推薦してゐる位で、何れにしても、紹介の價値は充分にあると思はれる。

取扱ふ問題が問題であるから、多少讀むのに骨が折れるか知れないが、この際心から讀者諸氏の御留意を喚起して置きたい。

昭和十一年八月

淺野和三郎誌

目次

一、魂の行進曲	(一)
二、個人的存在の彼方	(四)
三、大地の神界	(三)
四、三様の假相	(一七)
五、日界人	(三)
六、恒星上の生活	(二五)
七、日界人の發生	(三〇)
八、恒星上の光	(三九)
九、原始靈	(四一)
十、言語と宗教	(四六)
十一、生命力	(五)
十二、黒い星	(五)

個人的存在の彼方

浅野和三郎 評譯並

一、魂の行進曲

次に述ぶるところは、魂が順次に辿るべき行程表、所謂道中記とも稱すべきものである。

- (一) 物質界（これが個人的存在の發端である）
- (二) 中間界（古代人の所謂冥府で、死の直後に於て各自が置かるゝ休養地）
- (三) 夢幻界（幽界の入口で、佛教徒の所謂蓮の臺式の極樂淨土、一部の人達から常夏の國と呼ばるゝ所である。

要するに歸幽者が、地上生活の楽しかつた記憶のみを寄せ集めて築き上げた、取りとめの

ない夢想境)

(四) 色彩界(幽界の第二段で、個々の意念の働きが漸く自由自在となり、振動の極めて烈しい多彩多様の形態を造つてゐる。)

(五) 光焰界(幽界の第三段で、そろ／＼外貌、形態、色彩、感情等から離脱し、自我の天分職責を自覺し、個人生活を離れて共同の宇宙生活に入る。)

(六) 光明界(これが私の所謂靈界で、各自の魂は無色となり、喜怒哀樂の心の模様の上に超越して了ふ。無色は畢竟完全に均齊のとれた純理の表現なのである。)

(七) 超越界(これが私の所謂神界で、無上智の理想境であり、こゝには過去、現在、未來の區別もなく、一切の存在が完全に意識されるのである。これが眞の生命の實相である。現在の地球生命の存続中に、人間としてこの境に入るものは殆ど無い。)

類魂——同一系統に屬する多くの魂の集團で、所屬の魂と魂とは互に共鳴感應する。類魂は單數にして同時に複數である。そして類魂の指導靈が、統一原理の賦與者である。

表現形式——第一の假相が物質的肉體、第二の假相が、第三界、第四界等に於て造る幽的形態、第三の假相が球狀體で、これが太陽意識の象徴である。

(評釋) こゝに説く所はすでに『永遠の大道』中に述べてある所を、更に繰り返したもので、讀者の注意を喚起すべく、念の爲めに爰に再録されたに過ぎない。マイヤースが試みてゐる七界の分類法は、大體に於て正常である。讀者はこれによりて、ほど死後の世界に就きての概念が獲られると思ふ。但し私としては夢幻界、色彩界、光焰界の三界をひつくるめて幽界と呼びたい。何となれば、幽界居住者からの通信を精査討究して見ると、彼等は心境の變化につれ、同一人物であり乍ら、或る時は夢幻界に住み、或る時は色彩界、光焰界等に住むものと思はせらるゝからである。尙ほ詳細は括弧の中の註解を精讀されたい。

類魂説はマイヤースの通信中の、最も樞要事項であるから、特に讀者の注意を希望する。私の提唱する創造的再生説、又守護靈説は、この類魂説の眞解によりて初めて釋然と判る。次にマイヤースが自我の表現形式を、三種類に分類してゐるのも實に卓見で、私の調査の結果とも全然符合する。『自我』は無形の實在である。われ／＼はそれが何等かの形態に宿つた時のみ、初めて認識し得るのであるが、現在最も優れた靈媒能力の活用によりて認識し得るところでは、肉體以上に、たしかに二種の表現形式、假相がある。即ち一は肉體に酷似した幽的形態、一は極度にこまかな振動を爲しつゝある光球狀の形態である。此等に就き

ての充分の知識なしには、到底これから説く高等な心靈上の問題は判らない。

二、個人的存在の彼方

死後の世界の行進者の中には、いつまでも意識の第三段、夢幻界に停頓してゐる者がなか／＼に多い。先入的觀念に捕へられてゐる既成宗教の信者などは、大ていこれに屬する。が、中には到底これに満足し切れず、心靈的單位としての、かゝる孤立状態からきれいに離脱し、同一系統の類魂達と一體となりて、進化の道程を躍進し、以てよく個人的存在の彼方にまで進入する。これから説く所は、さうした進歩的人達に對する準備である。

「いかなる肉體も肉體以外の或物——魂によりて動かされる。肉體には自動的の性能がない。魂が働けばこそ、肉體は内から動かされ、魂が存在すればこそ、肉體には生命がある。」——是は實に血と肉と神經とより成る、人間の正しき指導原理なのである。「心」なしに「肉體」は動かない。「心」は「肉體」以上のものである。

若しも諸子が急激な死の場合を目撃するなら、この主張の正しいことは、容易に直覺し得られ

るに相違ない。心臓患者は今の今まで笑ひ、語り、遊び、又戯れる。ところが、その人は一轉瞬の中に斃れて了ひ、今までの運動も、生活機能も、跡方もなく消え失せて了ふ。打つても、突いても、罵つても、少しの反應も起さぬ、鈍き屍體は、最早何の能力もないどころか、いつしか異臭を放つて、顔をそむけしむるのである。

此實況を目撃しては、一人の人間をば、魂のなき只の器械である何人が信じ得ようか。「大切な中身が何所かへ逃げて了つた……」誰しもさう考へざるを得ないであらう。

自分は曩に魂に定義を下して、生命のそれぞれの階段に於ける「現在意識」であり、存在の總量であると述べた。唯物論者以外のものは、人間を體、魂、靈の三つから成るものと信じてゐるが、これは決して間違ではない。が、多くの人達は、魂の行進に階段があることを知らない。第五の光焰界に達すれば、各自の魂は、自己を局限する障壁を突破して類魂の中に混り、一方に於て、自己の個性を保存しながら、他方に於て、個人的存在の彼方に歩み入り、やがては、第六の光明界にまで進むことになるのである。

各自がエーテル體を具へて、第三の夢幻界に止まる間は、程度の相違こそあれ、まだ人間性を

保持してゐる。

が、更に進んで第四の色彩界に入り、形態のみの世界に於て、意識的生活を營むやうになれば、次第に人間性から離れ、地上生活中の表現形態とも、次第に遠ざかることになる。つまりこの境涯は、地上界の原型ともいふべき純美の世界であり、この界と地上界との相違は、正に巨匠の手に成れる原畫と、未熟なる素人畫家の手に成れる模造品とのそれに類似する。

繰り返していふが、或る一人の人格的存在（心靈的單位）は、類魂の一員であり、意識の各階段に置かれてゐる他の人格的存在、即ち低い所では夢幻界、色彩界等の人物、高い所では光明界、超越界等の宇宙的存在と、同一系統の魂の所有者なのである。が、夢幻界に意識的生活を送つてゐる間は、その人格が、まだ自我の全人格とは一致するに至らない。彼は物質の中に宿る部分だけの、自我意識の所有者でしかない。従つて彼は、自己と不離の關係を有する、同一系統の他の魂達の歴史にも通ぜず、又彼の先在的經歷の知識をも有たない。夢幻界を突破し得たものゝみが、初めて類魂の指導靈、自我の本體と交渉を起し、人類と智慧の本源との連絡係たる資格ができる。

光焰界の修行といふのは、つまり自我の全體と一致する努力で、それがすつかり完成した時

に、初めて光明界へと進むことができるのである。

人間が睡眠中に、その愛する死者と交渉を起すのは、つまり一の意識生活から、他の意識生活に入ることであるが、類魂の行ふところは、要するにこれに外ならない。同一系統に屬する類魂は、感情的に結びつけられて居る。愛は畢竟宇宙引力の一種であつて、互に愛する魂と魂とは、縦令両者が別々の意識の世界に居住してゐようとも、相互に引きつけられる。死は決して兩者を引き離す、永遠の關所ではないのである。

かの偉人、豫言者、天才者と稱せらるゝ人達は、多くの場合に於て、右にのぶるが如き一の神通的集團の一員である。それ等の人は、大抵第五界、第六界を目指して進み、従つて個人的存在の彼方に歩み入りつゝある。それ等の人の眼から觀れば、この第二流の遊星でしかない地球上の存在の如きは、さして興味を惹くものではなく、地上生活をば、過去の經歷に於ける單なる一小過程と見做して、より高き精神的飛躍の、無限の世界へと前進をつゞけるのである。

偉大なる魂は、時として一介の無名の士の肉體に宿ることもある。彼は極度に無我、極度に高潔、淡々として水の如き生活を送るので、一般大衆は全然これを看過し、従つてその人の死は、殆ど何人からも顧みられない。彼の地位は往々にして極めて低い。彼は單なる職工、書記、漁人、

又は農夫でしかない。が、それにも係はらず、かゝる人物こそ、しばしば類魂から直接の指導を受くる完全人なのである。不可視の世界に於て、最高者がしばしば最下者であり、最下者が時として最高者であらねばならぬ所以である。

私の所謂「魂の人」と呼ぶ人達の或者は、實に斯うした最後の地上生活を送るが、この一見花も實もなき、消極的な生活の間にこそ、彼はより廣き人格の準備を、着々として築きつゝあるのである。

これを要するに、人生の旅路は千紫萬紅、到底人智の想像し得る限りでない。が、何れの道を取るとしても、各自は一步々々に過去の行績を双肩に擔ひつゝ、不可知、不可測の宇宙の海へと入り行くのである。

第五界に於ける魂の最大事業は、自己の能力を開拓することによりて、自己を一の心靈的組織體の中に融合せしむることである。私の所謂心靈的組織體とは、要するに類魂の擴大であり、又擴充である。そこでは別種類、別性質に屬するものゝ存在が互に融合し、協力して、從來よりも一層高き標準の集團を構成するのである。こゝに至りて、地上の人間の拘束は次第に消失

し、われは宇宙的に考へ、やがて宇宙的に活動することにもなる。これが實にわれの進化した途上の一新紀元であつて、われは最早自分自身を大宇宙間の孤立的存在、かりそめに物質の世界に宿つた經驗を有つ、一の畸形兒であるとは考へないやうになる。夢幻界に居る間の人間は、まだ潛在意識的に、或る程度の孤獨感、不可知の環境からの壓迫感、恐怖心から脱却し得ない。が、第五界に達した時に、その恐怖は消え失せ、われも亦偉大なる心靈的組織體の一構成要素であることに氣づいて来る。さうなると宇宙は自分の親しき友であり、從來夢想だもしなかつた無數の新境地が、次第にわれの視聽に入つて来る。

遊星、太陽、月、無數の星辰——それ等が皆根本的に、われと切つても切れぬ不離の關係を有つてゐることが、ありと感知されて来る。

此等の隱微なる世界こそは、實に永劫の苦闘と、進化との記念塔である。それには傷ましき古疵の痕も残つて居れば、又無上樂、無量光の印象も刻まれて居る。そしてそれ等一切の經驗が、皆心靈的組織體の中に保存されてゐるのであるから、こゝに發揮さるゝ神智のいかに優秀であり、又その威力のいかに絶大であるかは、到底想像に餘りあるではないか。そこにはたゞ生を地球に享けたるものゝ經驗が、蓄積せられて居るばかりでなく、實に各種の太陽系所屬の遊星上の

経験が、蓄積されて居り、そしてその居住者達は、何れも光焰の形態をとりて、天界狭しと天驅けりつゝあるのである。靈分の相違で、各自の悟りの道は、それぞれ行き方を異にするが、しかし何れも皆窮極に於て、全大宇宙との融合一致を目指して、神智を磨き、神力を養ひ、一切の區別、一切の孤獨感、一切の恐怖心から離脱すべく、心魂を練りつゝあるのである。

(評釋) 断片的、即興的の叙述ではあるが、死後の世界の高層、彼の所謂『個人的存在の彼方』に於ける心靈的生活が、非常によく描かれて居り、最も貴重なる示唆をわれ等に與へてくれると謂つてよい。

すぐれた歸幽者からの通信によれば、あちらの世界の殆ど唯一の修行法は、精神統一であるらしいが、これは取りも直さず、魂の飛躍を遮ぎる障壁の突破が眼目である。マイヤースは、進歩の道程を夢幻界だの、色彩界だの、光焰界だのに分類してゐるが、勿論これは發達程度の相違に附した、一の名稱と見てよい。要するに幽界の修行といふのは、自己と自己の同一系統に屬する類魂(私の所謂守護靈も類魂中の一員)との融合一致を、第一の目標とするのである。私が精神統一の修行に於て、本人と守護靈との感應道交を、最大目標とするのもこの爲めである。守護靈に對する心の眼が開くれば、やがて類魂に對する心の眼も開けて來る。そし

て最後に類魂の指導靈、自我の本體との交渉が起つて來る。自我の本體は勿論超人間的實在

——自然靈である。

マイヤースが偉人、豫言者、天才者、又無名の英雄等に就きて述ぶる所も、ほとゞ首肯される。

これにつけてもわれは外貌、境遇等によりて他を評價することの危険を痛感する。

末尾に述べてゐる『心靈的組織體』の説明は、まことに貴重なる文字である。日本神道の根本精神は、ほとゞ遺憾なくマイヤースによりて説き盡されてゐる。『遊星、太陽、月、星辰——それ等が皆根本的……われはと切つても切れぬ不離の關係を有つてゐる事が、ありと感知されて來る。』——何といふ卓抜なる見解であらう。更に『その居住者達は、何れも光焰の形態をとりて、天界狭しと天驅りつゝある。』に至りては、正に天孫降臨その他の記事の註釋である。地上の物質界のみを眼中に置いて、日本の神代史を説くが如きは、正に言語道斷の處置である。嗚呼何れの日か、日本國のせめて知識階級だけでも、こゝまでの心境に到達することか。慄然として長大息を禁じ得ないものがある。

三、大地の神界

想ひ起せば、自分が死後の世界に冒險的旅行を試みることになつたのは、今から約三十五年前のこと、その間に、自分は多少太陽系所屬の、他の遊星に關する知識を漁り求めた。悲しい哉、自分は漸く第四界(色彩界)に達したまでの新參者であるから、まだ他の諸遊星の内面的生活を、意識的に把握するまでになつてゐない。自分はたゞ諸先輩につきて、金星その他に關する知識を、或程度迄學んだに過ぎない。

彼等の教ふるところによれば、金星には曾て一種の人類……多くの點に於て、よほど地球人とは相違してゐる、一種の生物が住んでゐたといふ事であるが、たゞその體軀は地球人に比して、非常に迅速な振動數を有つてゐるので、縱令金星人が現在生存してゐたところで、到底地球人の感識するところとはならないであらうとのことである。

兎に角物質論者の思考するやうな、所謂「人間」は現在に於て、太陽系中のどの遊星上にも生存してゐない事は確かである。して見ると、現在の地球人は、太陽系中の特殊の一存在として、

意氣揚々として、大手を振つて、彼等に與へられたる大地の上を横行濶歩してよい譯である。が、これはわれ等の太陽系に就きての話で、他の無數の太陽系中に、人間に酷似した存在者が絶無であると思ふことは、早計も甚だしい。

一たい人間は、自己の肉體に相當し、自己の感官を衝激する、地上の物質しか感識し得ないやうに出來てゐる。太陽系所屬の遊星の中では、地球が最も濃度が大い。従つてそれに生存する人間の勢力範圍は甚だ狭少で、稀薄精妙な物體を感識する力量は具はつてゐない。が、人間に感識できないから、そんなものは存在しないとするのは、餘りにも自己の貧弱な經驗に拘泥し過ぎた、幼稚な仕打である。物體を司配する原則は皆同一である。併しながら物體の濃度は千差萬別である。

人類がかく特殊の存在であり、何の遊星にも、人類が直接呼びかけるべき生物が居ないといふことは、事によると、一部の人士に、いさゝか孤獨寂寥の感を興へるかも知れない。が、請ふ安んぜよ、この宇宙間には、少くとも無慮一億の太陽系が存在し、そしてそれ等の中には、地球と同性質の遊星が、あちこちに撒布されてゐるのである。従つて少々遠距離ではあるが、人間の親類筋は、決して絶無ではないのであるから、その點大いに意を強うしてよいであらう。

かの無神、無靈魂を唱へる傲慢な論者の中には、今尙ほ高らかに叫ぶであらう。曰く「大空狭しと撒布されたる諸天體の中に、人間以上の敏感者はなく、又人間以上の尊き神の兒はない。」——が、これはたま／＼彼の想像力のいかに貧弱であり、又彼の理性のいかに澁晦であるかを表示する例證でしかあり得ない。われ／＼はいつまでも、宇宙を外側から觀測してゐてはならない。肉體を有つた人間であらうが、肉體を棄てた人間であらうが、いつも目的に活動しつゝある宇宙の力を、内部からさぐるやうにせねばならない。

愛と、力と、智慧、この三つこそ、實に大地の神廳……太陽神界を代表して、この地球の指揮と、統率とに當る神靈の世界から放射される靈波である。

前にも述べたとほり、大地の神靈界は、一團の類魂から成立する。もつとくはしくいへば、第五界(光焰界)以上の類魂が、直接宇宙意志の遂行に任じ、その組織は極めて緊密、その威力は極めて優越、たゞ一個の電子でも、たゞ一片の光波でも、決して無益に使用せらるゝことがない。見よ、物質界の構成が、いかによく整頓して居り、又いかによく調和して居るかを。他なし一切萬有の背後に、一分一厘の緩みも、たるみもなしに、神意を強行するところの、組織されたる團體が働いてゐるからである。人間は、もとより自己の天分の範圍内に於て、自己の運命を開拓す

べき自由を有つてゐる。が、大地、大海等の巨大なる機構、並にそれ等が空間に占むべき位置行動等は、悉く光焰の世界まで昇進を遂げた、すぐれた集團の受持にかゝり、それ等が細大漏さず、一々嚴正なる指揮計算を行ふのである。但し光焰界の居住者には、まだわれ等の宇宙——太陽系内部の知識だけしか與へられてゐない。光明界の居住者にして、初めて莊嚴無比の宇宙の創造的智慧の表現に通曉する望がある。

自分は太陽神の統制下に於て、地球の攝理を行ひつゝある高級の靈魂達が、すぐれた數學家であることを、餘りにも強調し過ぎたかと思ふ。彼等は數學家であるよりは、寧ろより多く藝術家である。彼等の仕事は、たゞ精密を期する地上の數學者のそれよりも、遙かに自由であり、遙かにうま味がある。前にも述べた通り、彼等の計劃は、最後の小數まで計算される。が、いよ／＼實行に移された時には、そこに幾多の變化があり、曲折がある。例へばかの電子の運動にしても、何等融通のきかぬ器械的運動とは、多少相違せる獨自の性質がある。不可視の宇宙を創造し、又維持するのは、數學者の頭腦ではなくして、寧ろ藝術家の想像力である。創造されたる者が、やがて創造者の側にまはる。こゝに生命の祕密、宿命の祕密が伏在する。

(評釋) 既成宗教はもとより、東西の靈界通信の大部分が、ただ概念的に宇宙神、並に宇宙精

神のみを説いてゐるに際し、マイヤースが、はつきりと宇宙神界、太陽神界、地球神界を區別し、更に進んで、研究の鋒先を金星の世界にまで延ばしつゝあることは、何と驚歎すべき卓見ではないか！もとよりその説く所は、まだホンの荒筋だけで、熱心なる研究者を十分に満足せしむるまでには達してゐない。が、その深遠なる示唆的價値に至りては、掛値なしに甚大である。曰く「愛と、力と、智慧、この三つこそ實に大地の神廳……太陽神界を代表して、この地球の指揮と、統率とに當る神靈の世界から放射される靈波である。」曰く「大地の神靈界は一團の類魂から成立する……。」曰く「一切萬有の背後に、一分一厘の緩みも、たるみもなしに、神意を強行するところの組織されたる團體がある。」曰く「不可視の宇宙を創造し、又維持するのは、數學者の頭腦ではなくして、寧ろ藝術家の想像力である。」曰く「創造されたる者が、やがて創造者の側にまはる。」何れも皆金玉の文字でないのはない。觀念の遊戯をこれこととする既成宗教の全部は、これが爲めに光を奪はれて仕舞ふが、ひとり日本の古典に盛られた啓示のみは、これですつかり生きて來る。他方群疑の中にひとり研究をつづけて來た私としては、まことに百年の知己の感に堪へない。

四、三様の假相

永遠に通ずるわれ等の行旅の間に、われ等は三様の假装を探る。即ち肉體に宿つた時代、肉體を離れた時代、及び光焰の時代で、それ等の何れの形態も、意識の同一水準線、又はより以上に達せるものには立派に認識し得る。但しこの三つは謂はゞ基礎的形態であつて、細別すればまだ幾つかに分れる。尙ほ別に光明體もある。が、この光明體は一の假装とも謂ひ得ないところがあつた。何となれば、それは一つの全的想像の個性的表現、眞善美の一結晶體ともいふべきもので、要するに人間の思索以上の或物だからである。

自分には、まだこの最後の神祕に就きて、物語らうとする勇氣がない。自分はそれ以下の、三つに就きて述べて見たいのである。大體に於いて魂の殿堂は、三階段の表現形式に據るのであるが、それ等は、綱要の點に於て互に相違してゐる。肉體に宿る時代には、普通は何人も自己の思念によりて、その形態を變へることができない。もちろんそこに多少の例外はある。東洋のすぐれた行者達の間には自己の本靈を呼び寄せて、或る程度自己の變貌に成功したものもないではな

い。又何れの時代、何れの地方にも、時に異常の信心のお蔭で、偉大なる神明の加護に浴し、跋者にして起ち、盲者にして明を獲たやうな場合もある。但しこれは千百萬人中に、たゞ一人か二人しか見出されない極度の例外に屬し、普通人は、到底地上生活中に、自己の意念によりて自己の肉體を變形せしむる力はないのである。然るに死後の世界に在りては、事情がすっかり異つて來る。夢幻界は、東洋人の所謂蓮の臺うすなの極樂淨土で、死後の世界の最下層に屬するものであるにも係らず、その居住者達は、意念の力で、任意に自己のエーテル體を變へることができるのである。地上の人間が恒星であるなら、歸幽靈は言はゞ遊星に該當する。更に進んで第四界（色彩界）に入れば、外貌の變化は自由自在、單なる想像の力で、自分の姿を自分の望み通りに造り得る。無論それは各自の器量だけのもので、御本人がいかに得意でも、より高き精神的飛躍を遂げた人達から見れば、それは一向に醜惡な姿であるかも知れないのである。

鬼に角各自は夢幻界の高層に於て、初めて心の威力を味讀する。そして或る特殊の心境、或る特殊の性格を開拓することによりて、色彩、面貌、又形態の上に根本的の變化を起し得ることを充分に體驗する。

但し蓮の臺うすな式の夢幻界の下層に於ては、まだ過去こたの記憶の殻から脱出する事はできない。

彼はたゞ外面的の變化に満足するだけで、精神的、人格的大變化を遂げるまでには至らない。彼の最も得意とするのは、一種の若返り法で、普通二十五六歳位の元氣な、若々しい生前の姿をとるのである。

たゞ困つたことに、その想像力が尙ほ貧弱であり、又その性格が尙ほ未完成である爲めに、彼は單なる地上生活中の若者の姿しか造り得ない。換言すれば、彼は平凡な地上の人格の型を破り得ず、何等潑刺たる創造も、又何等豐滿なる變化も爲し得ないのである。

大體人生の行旅に疲れた人達の共通の渴望は、何等の努力、何等の苦勞もなしに、親しき人達と膝を交へて、醉生夢死式の安逸を貪り得ることである。かるが故に歸幽者の多くは、少くとも或る期間、古代の神學者流の想像せるやうな、一の極樂境にとゞまることを欣ぶのであるが、むろんそこにはたゞ安樂があるのみで、進歩は見出されない。で、彼等が意識の第三界（夢幻界）に達した時は、往々にして、それが善人の達すべき終局の目的地であるかの如く推定する。東洋の或る宗派では、これに『蓮の臺うすな』の名稱を與へるが、まことに似つかはしい名稱である。エジプトのいはゆる水蓮の世界、——これも亦同工異曲である。うつら／＼とせる夢心地、動かぬ水、變らぬ景色、努力なき満足……思慮淺き人達には、全くそれが永世の象徴とも見えるであらう。

が、この推定は勿論間違つてゐる。魂は一度物質的肉體に宿りて、努力と昂奮の苦い経験を嘗めて来た。彼にとりて一時の休養は悪くもないであらうが、彼は更に別種の物體(エーテル體)に宿りて、更に／＼深刻な無数の経験を積み重ねねばならぬ。水車の生活では、到底いつまでも心の満足は獲られないのである。

斯くの如くにして、永遠の世界は、到底在來の宗教家などの愛用したやうな、簡単な概念的辭句を以て、手取早く片附けて了ふことはできない。われ等が地上生活に別れを告げた當座は、その思想感情がいかにも狹隘で、そのまゝでは到底眞の飛躍は望まれない。われ等はこゝで覺醒一番、進歩に對する精神的欲求のまに／＼、善かれ悪しかれ、猛然として向上の一路を辿ることになる。が、われ等が尙ほ人間的性情の羈絆に縛られてゐる間は、とても眞正の進歩は望まれない。その必然の結果として、遂に努力が起り、煩悶が起り、苦惱が起り、又憤慨が起るのである。

最初の二つの假相、肉體とエーテル體との相違は、まだ／＼深刻とは謂はれない。それは思想が外物に對して及ぼす威力の相違でしかない。第三の假相、光焰體を採るに及びて、こゝに初めて根本的の相違が起る。われ等はこゝの形態を以て第五界(光焰界)の旅をつゞけるのである。

(評釋) 爰に説く所は、形態に就きての親切な解釋で、幽明交通を試みる人、特に靈視能力の

所有者にとりて、最も有力な參考資料である。一知半解の佛教徒などは、極めて安價に假相だの實相だのといふ文字を濫用するが、嚴密な意味に於て、殆ど用を爲さない。彼等の所謂實相は實は實相でも何でもなく、單に超物質的エーテル的假相を指して居るに過ぎない場合が多いのである。私は多くの實驗の結果に基き、死者の姿を動靜の二つに分け、前者は生前そのまゝの形態を採り、後者は細かな振動を有する光球狀を執ると述べてゐるが、マイヤーの述べてゐるところも、叙述の方法こそ異なれ、全然これに符合してゐるやうである。マイヤーは第三の假相に重きを置き、歸幽靈達は、その形態を以て第五界の旅をつゞけると言つてゐるが、それは取りも直さず、歸幽靈が精神統一状態に於て採るところの球狀體に相違ない。これにつけても今更驚歎されるのは日本語の神祕性である。魂は「球」であり、又「球の火」である。これほど深遠なる言葉が、果してどこの國に見出されるか！日本國民が言靈の幸ふ國とたゞへるのも、全く無理もない次第だと思ふ。

五、日界人

自分は歸幽後、漸く第四界（色彩界）までの旅程を續けたに過ぎないが、前にも述べた通り、こゝは理想化せる形態の世界である。自分が實際に知つてゐるのは、そこまでの世界で、第五界（光焰界）となれば、深き主觀的狀態に於て、辛うじて味はひ得るに過ぎない。第五界に於て、個人的存在が消えて了ふことは確かであるが、しかしその真相は、まだすつかり自分の身に附いて了つたとは謂ひ得ないのである。

すでに述べた通り、各界の間には一の休養期、所謂冥府^{ハイム}があり、歸幽者は一界から他界に上昇する毎に、必ず暫時この冥府にとゞまるのであるが、彼が二度目の冥府生活を終へて第四界に進み入り、そこで自分と同一系統の類魂の生活に混るやうになると、彼等の前身がすつかり判り、同時に自己の通過し來れる、個人的存在としての徑路がよく判つて來る。斯うなると、彼は孤立した一單位ではなくなり、自己の屬する類魂全體の直覺、傾向、及び基本的特質が、悉く自己の藥籠中のものとなつて了ふ。但しこれでは、まだ一修行が濟んだとは謂はれない。彼は百尺竿頭更に一步をすゝめ、多くの類魂から成立する、「心靈同族」の生活に通曉するやうにならねば

ならない。こゝでは是非とも、一度天體生活を經驗すべき必要が起り、乃で第三次の變形を試みねばならぬ段取になつて來る。その變形こそ取りも直さず、太陽界の意識の象徴たる光焰體である。彼はその姿で、銀河の内部に存在する、一つの恒星の中にくゞり入ることになるのである。

（評釋）いかにも淡々たる叙述なので、うつかり之を讀めば、恐らく其の中に含まれたる、肝要な示唆を握み得ないことになるであらう。先づ標題の「日界人」——これはわれ／＼日本民族に取りて、無上の福音であらねばならぬ。先へ行けば分るが、マイヤースの所謂「日界人」とは、人間靈のことではなく、太陽系所屬の自然靈、主として龍神を指して居るのである。つまり太陽系に居住する原始靈、日本古典の所謂天津神で、勿論その軀は超物質的エーテル體である。

次にくれ／＼も銘記していただきたいのは、三様の變形である。幽界居住者の形態は決して造り附けではない。普通歸幽者は生前に酷似した、若しくはこれを理想化した姿で働いてゐるが、深い精神統一状態に入つた時は、間斷なく閃き動く一の光球狀——マイヤースの所謂光焰體になるのである。この形態こそ、幽界居住者として取り得る最高の姿である。

次に讀者の注意を喚起したいのは、類魂の共同生活である。われ／＼が各自の守護靈を呼

び出して調査を進めて見ると、守護靈は決して單なる孤立的存在でなく、守護靈の奥には、更にその守護靈が控へて居るのみならず、廣く同一系統の靈達と自由自在な聯絡を執り、緩急に應じて、いくらでも援助を受けて居ることを發見する。地上の人間でも、自分の天分が何であるか位の見常がつかんでもないが、いよくそれがはつきりと判るのは、歸幽後に於て自分の守護靈、並に同一系統の先輩達(マイヤースの所謂類魂)と、直接交通を開いてからであるらしい。マイヤースが「彼等の前身がすつかり判り、同時に自己の通過し來れる個人的存在としての徑路がよく判つて來る……。」と言つてゐるのは、まことに味ふべき言葉である。

更にマイヤースが「心靈同族」を説いてゐるのは、一層感歎に値する。彼の所謂心靈同族とは同一理想、同一使命の達成に盡瘁する類魂團のことであらうが、これは實に日本精神の眞髓を擲んで居ると謂はねばならぬ。唯物思想に捕へられてゐる人達は、「天孫民族」を以て、單に地上の日本民族のことと考へてゐるが、これは實に皮相の觀察である。天孫民族とは天孫邇々藝命を中心として、大使命の遂行に當る有力なる自然靈界、並にその機關たる地上の人類の總括體なのである。日本國民の心靈常識がそこまで進まぬ限り、日本國土内にかゞはしき思想團體、信仰團體の發生は到底免れさうもないと思ふ。

六、恒星上の生活

太陽原子は、勿論地球原子とは全くその型式を異にし、殆ど思議すべからざる速度を以て、且つ消え、且つ現れつゝある。で、歸幽者が深き入神状態に於て、第三次の變形を遂げ、所謂光焰體を取ることになれば、彼は地球のそれとは全然異なるリズムの中にくゞり入り、從來と全然別箇の行動をとることになるのである。

彼が見學の爲めに選べる恒星が何であらうとも、そこに見出さるゝ原子の構造は、到底地上の物理學者の想像に餘りあるものがある。自分は専門家でないから、くはしい事は言ひ得ないが、大體恒星上の原子は、これを二種類に分類することができる。即ち甲は光狀原子、乙は液狀原子である。何れも地球の原子に比して、遙かに迅速に分解し易いが、しかし恒星の中心部は液狀原子から成り、それは周囲の光狀原子に比して遙かに鈍重である。とは言ふものゝ、假りに人間の肉眼が、恒星の中心部を目撃し得るとしたら、それは猛烈に泡立ち、又煮えくり返る、一大焦熱地獄の觀を呈してゐるであらう。

が、恒星の構成につきての説明は、しばらくこの邊で打ち切り、これから天界旅行者の體驗を物語ることしよう。前にのべた通り、その後彼の取る形態は、光輝性の原子から成立する一光焰體である。彼は幽界に於ける修行によりて、すでにいかにして自己の姿を變へ、又いかにしてこれを統御すべきかの秘法を心得て居るから、恒星の世界に歩み入つても、さして戸惑ひはない。彼は智力、想像力の限りを盡して、首尾よく超形態の形態をとりて、未知の新世界の探險に當り、必要に應じて自由自在にその姿をかへ、自分をとりまく電光石火式旋律と歩調を合はせる。その時の氣持ちは、平凡低調な人間界の言葉ではとても表現すべくもない。

もちろん、さうする時の彼は、自我意識の全部を拂へてはゐない。その粗雑な部分は悉く後に振り落され、たゞ彼の高級意識のみが、恒星界の新經驗に當るのである。

この際讀者としても、須らくその心の中から火焰に對する恐怖心などを掃蕩し、飽くまで雄大にして、莊麗なる心境を開拓して、自分の説く所を味讀して戴きたい。火を單なる火と考ふることなく、これを人間意識よりは、遙かに精妙なる高級意識の表現であると思考してもらひたい。銀河の世界には、幾百萬とも知れぬ多くの星晨があり、更に眼を天の一方に轉ずれば、そこにも亦赤、白、青等さまざまの光を放つ天體の海がある。そしてそれ等が悉く何等かの生物、何等か

の意識的存在の棲家なのである。讀者よ、願はくば極度まで想像の翼を擴げ、何事も、又何物も、徒らに不可能視し、又徒らに不可思議することを止めよ。飽まで發達程度を異にせる無数の生命を載せ、飽まで整然たる秩序を儼守して、無邊際的空間をめぐる天體の一大行進曲——これが實に宇宙の實相なのである。

われ等の屬する太陽系の遊星上に於てさへ、人類の数は比較的少數で、そこに見出さるゝ生命の大部分は、所謂自然靈なのである。況んや他の諸恒星にありては、その構成要素が異なる如く、その居住者の性情形態が、地球とは全く選を異にしてゐる。恒星上の時空の觀念は、地球上の時空の觀念とは天地懸絶する。従つて恒星人の運動の迅さ、又その形態の急變化は、到底地上人の窺知を許さないものがある。自分の見學せる恒星の一つは狼星であるが、狼星人の體軀は、われ／＼の眼には殆ど體軀とは稱し難きまでに稀薄であり、又非物質的なのである。現在の狼星は、太陽の幾倍かの烈しさで熾んに燃焼しつゝある。斯うした環境に安住する狼星人の體軀が、いかに超現實的であるべきかは、蓋し言を待たないであらう。

こゝでわれ／＼は、何は措いても、先づ狼星その他諸恒星の構成原子につきての概念を有たねばならない。それなしには、とても自然靈の性質は會得されさうもない。卑見によれば、各天體

を通じて三種の原子が存在するやうに思ふ。即ち——

- (一) 物質原子——これが地球などの構成要素。
- (二) 光状原子——これが太陽の光と熱との構成要素で、自然靈の體軀も亦これで造られる。
- (三) 液状原子——これが太陽その他恒星の中核を構成する要素で、光状原子に比すれば遙かに鈍重である。

大體に於ていへば、恒星上の生物の歴史は、地球上の生物のそれと酷似し、自然靈も亦人類同様、緩慢なる進化の道程を辿るのである。自然靈がいつも發達の同一水平準線に停止するものと考へることは誤謬である。無論自然靈は、自分自身の内に驚くべき潛勢力を包蔵して居る。が、その潛勢力は長年月の間に漸次發展顯現し、最後に極めて複雑、極めて鋭利なる生活機能を發揮することになるのである。完成された大自然靈の威力は、とても地上の人間の窺知し得る限りでない。が、自然靈の發生を司配する根本原則は、地上の人類を司配する一般原則と、そこに何の相違もない。

恒星の母體は勿論星雲である。天地開闢の初期に於て、恒星は一つ／＼火の母體から離脱し、爾後空間を通じて、獨自の旋轉運動を営むことになつたのであるが、當初の爆音並に光焰のいかに猛烈慘烈を極めたかは、到底こゝに想像の限りでない。むろんさうした未完成期の恒星には、まだ自然靈は發生してゐない。間斷なく爆發し、間斷なく變化する原子からは、到底個性を具へた意識的存在が發生し得ないのである。が、最初の爆發が漸く鎮靜に歸し、燃ゆべきものは燃えつくし、散るべきものは散りつくして了ふと、こゝに初めて生物の發生が可能となつて來た。これは地球をはじめ、何れの天體を通じても誤らざる一般原則である。無論各天體の現在の狀態とても、決して永久不變なものでも何でもない。流轉は萬有の通則であり、老衰は天體と雖も決して免れない。一つの恒星から光状原子が消滅することになれば、自然靈も同時にその世界から體を没して了ふ。何となれば、彼等は自己の表現機關を構成すべき要素を失ふからである。現在とても無限の空間には、無生命の天體が幾つともなく存在し、殆ど有るか無きかの薄光を放ちつゝ、果敢なき行進をつゞけてゐるのである。

(評釋) 幽界居住者が深き入神狀態に於て、その高等意識を以て、辛うじて經驗し得たところを、地上の人間に放送しようとするのであるから、随分無理な注文たるを免れない。マイヤースが、何をわれ等に告げんとするかはよく會得される。そこには相當貴重なる暗示もないではない。が、遂にいかんともし難きは、この種の文字に免れ難き一種の夢幻感、抽象感

である。譯し終りて覺えず長大息を禁じ得ない。これを讀みてマイヤースの心境を汲み取るものが、現在の日本に果して幾人あるであらうか。

七、日界人の發生

『日界人(Solar Man)なる用語は、太陽系所屬の天體に見出さるゝ超物質的自然靈を指すので勿論普通の物質的肉體を有つた人間とは、全然その選を異にする。幼稚な古代人には、内面の世界につきての觀念が乏しく、従つてよしやそれ等の存在に氣のつくものはあつても、徒らにこれを理想化し、又英雄化するより外に、せんすく詮術を知らなかつたが、われ／＼としては、急いでその修正に當らねばならない。

さて、或る一つの魂が、新たに天體のどれかに發生するにつけては、何は措いてもその發生の當事者、親がなければならぬが、この場合の親といふのは、實に光焰體を有つ一群の自然靈なのである。天上の愛は地上のそれに比して、遙かに共通的、團體的の性質を帯び、所有慾、獨占慾と言つたやうなものが極めて少ない。つまり日頃共鳴的に働いて居る日界の年若き一群の男女

が、生々の愛念に刺戟せられ、互に心を合せ、力を合せて熾烈なる思慕と、想像との凝念を送り出すことによりて、茲に忽然として、一個の獨立せる、光焰的存在を創造するのである。無論それは容易の業ではない。それは實に藝術的努力と、奮闘と、長期間に互る忍耐との最後の結晶なのである。かるが故に、この世界の出生は、寧ろこれを『生命の具象的創造』と稱した方が當れるに近い。何となれば、それは人間のやうに、一つの魂が母の胎内に宿るのでなくして、體外に放射されたる、想像の雰圍氣内に宿るからである。創造の原則には、そこに何等の相違もない。しかしその手続きの上には、正に天地の相違がある。

人間には、容易に相愛する一對の男女の觀念を棄て難いが、これをそのまま自然靈界に當嵌めることは、絶対に禁物である。そこでは六人懸り、八人懸り、十人懸り、又は十二人懸りの場合となる。無論それが類魂中の男女一對から成立することは、必要條件であるが、しかしすべてが一樣に、創造の勞苦を分擔せねばならぬのである。この際くれ／＼も銘記せねばならぬことは、嬰兒の出生が、想念の世界に於ける純精神的、純審美的、又純情緒的の仕事である事で、肉的要素は少しもこれに加味されてゐないのである。一群の若き男女間に醸成された情熱の暴風雨と陶酔、至醇至粹の天人的戀——そののみが實に一個の新らしい獨立體の完成に必要なのである。

無論斯うして發生した新自然靈は、そのまゝでは未完成である。それは人間の幼兒と同じく、間斷なき進化發達を遂げ、漸くにしてその丁年期に到達するのであるが、たゞこれに要する歲月の如きは、全然人間界のそれとは桁違ひである。同時にその形態の變化も亦無常迅速、到底限りある人智には諒解も信用もできない位である。

日界人の生活が、かくも變化性に富んでゐるのは、畢竟日界人が、太陽原子と同一諧律リズムで動く結果である。地上の天文學者は、天體の物質的要素のみを視るから、これを單なる瓦斯狀態であるなどいふが、實をいへば、その中には潑刺たる生命が宿つてゐて、熾んに創造進化の大業に當り、その規模の偉大なることは、到底人間の窺知を許さないものがある。こゝでは、心と外形との反應が瞬間的なので、對内と對外、可視と不可視とが殆ど同一歩調で進行する。現界で見るとやうに、鈍重なる肉體が銳利なる智能、敏活なる感覺に隨伴し得ないで、後へに墜着たるやうな醜態はどこにも見られない。

自然靈も人間と同じく、形體のあるのと、無いのとの二種類に分れるが、たゞ兩者の懸隔は人間のやうに大きくはない。自然靈の中身體は、物的原子から成立してゐるから、その必然の結果

として、原子的構造によりて束縛され、單なる思念の力で、自己の形態を任意に改造するやうなことはできない。その點幾分か地上の人間と似てゐるが、自由といひ、又不自由といひ、要するにそれは程度の問題で、自然靈と人間とを同日に論ずる事は到底できない。すでにのべた通り、自然靈の形態は非常な變化性に富み、前の形態は直ちに後の形態の内に流れ込み、そしてそれ等は、順次に陸離たる光焰の中に迅速に飛散して了ふ。私は曩に意識の流れといふことを説いたが、自然靈にありては、その形態も亦一の流れであるといへる。要するにその迅められたる想像、研ぎすまされた敏感性は、自然靈をして時に對する觀念を著しく縮少せしめ、斯うした急變化の生活を、格別不安定とも考へしめぬのであらう。

御承知の通り、人間の肉體は七ヶ年の星霜を閲してすつかり一變する。然るに日界人の形態は、地上の一秒時の何分の一かの間に、全體的变化を成し就けて了ひ、後にはたゞ一粒の微分子さへも残さないものである。人間と自然靈とでは、正に天地の相違である。人間の意識は物質的の緩慢なる諧律リズムと調子を合せ、これに反して、日界人の精神は超物質的の、極度に迅き生命と經驗とに調子を合はせる。前者を蛙蟪なぐさの歩みとすれば、後者は飛ぶ燕のそれであらう。……イヤこれでもまだすつかり當てはまらない。星辰の世界に於ける思想、行動の迅さは、とても地上界のそ

れとは全然比較にならないのである。

それ等の世界の表面に於て演出せらるゝ奇妙な活劇は、幾分か地の物質界に行はるゝ生活様式に類似した點が絶無でもない。原則的には兩者は恐らく同一でもあらう。——が、日界人の情熱と、人間の情熱とでは、全然相撲にならない。で、若しも日界人から充分にその情熱をあびせられたとしたら、それは足元に爆破する砲弾と同じく、地上の人間を木葉微塵に粉碎せねば措かぬであらう。

畢竟天上と地上との二つの世界の生活は、殆ど比較以上の或る物である。例へば地上の人間界を訪れる——夜の帳——日界人としては、全然そんなものゝ存在を知らない。例へば又地上の人間を悩ますもろくの疾病——これも日界人には全然不可解の謎である。それから地上の人間の頭から離れぬ死の悩み——これも日界人には全然想像の外に屬する。もちろん日界人とても、永遠に形態に包まれてゐる譯ではなく、或る時期が來れば、その魂の動きが、その體軀の諧律と歩調を合はせて行くことができなくなり、こゝで必然的に兩者の分離作用が起る。これを死といはゞ言はれぬこともないであらうが、しかしそこには所謂死の悩みも、又悲しみもない。魂は莊嚴無比の歡喜に慄へつゝ、今は用なきその形態から脱出して、無限に擴がる宇宙意識の中に混つ

て行くのである。かゝる經驗は、これを死と言はんよりは、寧ろこれを『宇宙的人格への伸展』とでも言つた方が適當であらう。

(評釋) マイヤースの通信は、いよ／＼出で、いよ／＼高遠の度を加へるかの感が深い。「日界人」といふ新熟語は、まことに耳新らしいが、しかし考へて見ると、なか／＼適切な言葉であると思ふ。日本には古來天津神だの、國津神だのといふ言葉があり、これに適切なるなる神靈主義的解釋を加へれば、非常に結構であるが、何分にも多年偏狹固陋な神道家、國學者達が、物質臭の紛々たる解釋を下して、世人の頭腦に面白からぬ先入的觀念を注入して了つたので、日本國はこの際何とかして、大々の血清療法を施し、本來の日本精神に立ち返るべき需要が大いにあるのである。この秋に當りて、突如としてマイヤースの卓抜なる通信に接したのであるから、われ／＼は實にうれしいのである。不敏乍ら私は年來微力の限りを盡して、正しき幽明交通の途を樹立することにつとめ、お蔭で私の手元には、マイヤースの所謂日界人に關する報告が、澤山集められてゐる。その一部はすでに發表され、又これを手掛りとして、日本古典の神代の卷に對する新解釋ともなつたのであるが、日本にも西洋にも、まだそこまで突込んだ研究を行つてゐるものがきはめて少く、ために私の意見は、容易に唯

物主義的思想に凝り固まつた現代に容れられず、以て今日に及んでゐる。

見よ現在の日本では、今尙ほ超物質的神靈界の存在にすら眼がさめず、長くも太陽神界の主宰にまします天照大御神、又地球神界の統治の責に當らせ玉ふ皇孫命をはじめ奉り、その他の神靈を單なる「古代人」と解せんとする、頑愚な學究が多いではないか。又見よ、現在の日本には性懲りもなく活神氣取り、活佛氣取りの不健全極まり、不都合極まる山師を中心とした、似而非信仰團體が、お膝元の帝都の眞中にまでのさばり返つてゐるではないか。

斯んな唾棄すべき風潮は、もちろん一時も早くわれ等の神聖なる國土から、きれいに掃蕩せねばならない。それには何は措いても心靈科學の發達、又神靈主義的精神の普及以外に、絶対に手段方法はないと思はれるが、斯うした時に、マイヤースの通信の如き立派なものが出現したのは、正に大旱の雲霓以上に難有い。私としては今頃自國の靈媒を通じてのみ通信を受取り、英國の靈媒カムミンス嬢とは、全然交渉を有つてゐないのに、双方の通信内容が、宛かも符節を合するが如く、ピタリと一致して居るのだから實に愉快なのである。斯うして見ると、眞理はどこまでも眞理、事實はどこまでも事實、斷じて洋の東西、時の古今を問はないのである。これに反して、かの迷信者流の振りまはしてゐるデモ靈界通信、デモ教義教條

に至りては、彼等所屬の特殊部落以外にはさつぱり通用しない。こゝに眞信仰と偽信仰、ホンモノとニセモノとの儼然たるけぢめがあるのである。

御承知の通り、日本古典中の最も重要な項目の一つは、所謂「産靈」の神事である。最初が伊邪那岐、伊邪那美二神の間に行はれた「みとのまぐはひ」、次に天照大御神と須佐之男命との間に行はれた「宇氣比」の神事、それから日本國民の夢寐の間にも忘れてならぬ、皇孫邇々藝命の御出生と御降臨、その外日本の神代史の到る所に、神々の誕生の物語が出て來るのである。心靈科學が超物質の世界に探求のメスを進めるまでは、いかに此等を解釋してよいか見當がとれず、そこで苦しまぎれに、神話の人的解釋が試みられたり、空疎な宇宙大靈説が提唱されたりしたのであるが、勿論そんなゴマカシものは、全然役に立たない。大體大自然界裡の神祕は、單なる人間の頭腦のみを以てこれを付度すべく、餘りにも深遠、微妙、複雑、多岐なのである。

人間にとりて、到底不可抗力ともいふべき、この大缺陷を補ふには、ドウしたところですぐれた啓示、すぐれた靈界通信の力に待つ外はない。この際マイヤースの通信は、われ等日本國民に對して、特に貴重たる指示を與へる。何となれば、それは宛然日本古典の神靈的解

釋書たるの觀があるからである。

むろん私は、この通信を細大漏らさずそのまま鵜呑みにせよとは言はない。かゝる通信の常として、やゝもすれば斷片的に流れ、説いてその意を盡すに至らざる憾みも決して尠くない。が、大體に於て、兎に角この通信は人文史上に、あまり類例のなき、大文字であると言つてよいやうである。私の譯筆は、たゞ原意を傳へるに急で、甚だ卑俗蕪雜であるが、讀者が炬の如き眼光を以て、その紙背に潛める眞義を汲み取られん事を心からん望で止まない。念の爲めに、序でにこゝで一言注意して置きたいと思ふのは、人間の懐胎の問題である。物質醫學からいへば、受胎作用の當事者は、勿論一對の男女だけである。しかし乍ら心靈的にその内面装置を查べると、人間の男女の背後には本人達の守護靈、司配靈、又時とすれば憑依靈等が控へて居り、更にその上には、産土の神靈が監視の任に當つて居り、甚だ以て複雜を極め、人間は寧ろそれ等の傀儡に近いのである。この事實をヌキにして考へるから、戀愛の問題も、懐胎問題も、今以て本當の解釋ができないのである。

マイヤースが本章で説いてゐるところも、是非右の事實を考慮に入れて味讀して戴きたらう。さうすると、讀者は初めてよくその眞義に觸れ得るかと思ふ。

八、恒星上の光

星辰の世界に夜はないが、しかし或る時期に於て光の性質に變化が起ることはたしかで、そして日界人とても矢張り一種の睡眠をとりて、元氣の恢復を圖るのである。彼等の形態には、覺醒中と同じく、睡眠中にも自動的に變化は起るが、たゞ何等かの原因で、諧調リズムが錯つて來ると、それが順調に運ばない。それがつまり恒星界の醫師の所謂疾病に當り、その結果、彼等は在來の生活から、早晚離脱し行くことにもなる。

恒星界の光は、勿論地上の器械では測れない。それは一種の精密電氣ともいふべきもので、普通のお粗末な光の内部に潛在する柔かな閃光である。日界人から見れば、普通の光などは、寧ろ一の實體の感があるのである。従つて日界人の眼に映する太陽、その他の星辰は極めてなごやかな、殆ど眼にもとまらぬ程に合成された光の海でしかない。人間界に知られてゐる如何なる瓦斯も、又如何なる電氣も、決してその匹儔でない。それは全然別の階段に屬する照明であり、それを研究する爲めには、科學者は是非とも第五界(光焰界)に入ることを要するであらう。

若しも地上の畫家にして、恒星界のオクタヴオに接することが出来たら、彼はその種類の多きを見て、どんなにも驚喜の眼を見張ることであらう。これと同様に、その音階も亦非常に範圍が廣い。この音と色こそ、實に星辰界に於ける生活の重要素なのである。自分にはその手續きはよく判らないが、日界人達は、たしかに右の二つのものから必要な營養素を攝取して、潑刺たる元氣を維持して居るものらしい。

(評釋) 日界人が一種の睡眠をとり、又營養をとるといふことをきいて、ちよつと不思議に感ぜらるゝ方があるかも知れない。他界の居住者には飲食や睡眠の必要がないといふのが、多くの靈界通信の教ふる所である。が、これは恐らく人間界に見る如き飲食、並に睡眠の必要がないといふことであると解すべきで、他界の居住者といへども、いやしくも生活機能を有つてゐる以上、矢張り何等かの營養、何等かの休養の必要を感じるのが當然であらう。私としては寧ろこのマイヤースの通信に共鳴を感じるものである。

九、原始靈

自分は今までの叙述中に於て、人間にあらざる原始靈につきて、唯の一度も觸れずに置いたから、こゝでその補充を試みなければなるまい。原始靈とは地球その他の遊星上に、たゞの一度も肉體を有つて發生したことの無い、原始的存在の總稱である。此等の原始靈は、その全部が決して地球の所屬ではなく、その中の或者は、現在尙ほ燃焼をつゞくる光焰の世界に生を享けるのである。遊星所屬の原始靈と、日界人とはその形態を同じうしない。假りに日界人を人間とすれば、原始靈は言はゞ地上の動物に該當するであらう。そしてその形態は、曾て火中に生息したと傳へらるゝ、神話のサラマンダー(火龍)に類似した點がないでもない。

地界以外の天體に生息する原始靈の形態は、時に地球の原始靈のそれと異り、奇想天外式なものも見受けられる。彼等はしばしば好んで大蛇の姿を模し、又龍の姿を模する。龍は神話的存在であるが、しかしかゝる生物が、歴史以前の遠き大古に於て、曾て地上に生存しなかつたとは何人が斷言し得よう。兎に角龍姿を取れる原始靈達が、陸離する光焰を放ちつゝ、無限の空間を運

行する諸天體の常住者であることは、そこに少しの疑ひもない。要するに、諸天體に於ける原始靈の生活は決して一樣ではない。その種類からいへば、必ずしも地上の動物界ほど豊富ではないが、しかし一としてその所屬の天體生活の、最も重要な構成要素でないのはなく、類魂は此等の原始靈の經驗を取り入れて、初めて完成を期し得るのである。

(評釋) 現代人が一般に夢想だもしない超物質の事實を、耳新らしい用語を以て表現しようとするのであるから、その難解は推して知るべきであらう。私の譯語も未だ洗練を経たものでないから、尙更その感が深いであらう。依つて念の爲めに、マイヤースが何を通信しようとしてゐるかを、こゝに再説して見ることにしよう。

私は超物質界の居住者を二種類に大別し、甲を自然靈、乙を歸幽靈と稱へることにしてある。御承知の通り、前者は唯の一度も肉體を有つて物質界に生れた經驗のない。エーテル的存在、後者は物質的肉體を棄て、歸幽した人靈その他である。これは取扱の便宜上、假りにさう決めたまでゝあるが、大體に於て當を得て居ると思ふ。むろん私自身も右の『自然靈』といふ言葉の内容が、非常に廣汎に互つてゐることを知らないではない。が、心靈知識の未だ普及せざる現代に於て、しばらく分類をこの程度に止めて置くことが良いと考へたのである。

る。

ところが、マイヤースの通信を紹介するには、そろ／＼この分類法丈では不十分になつて來た。何となれば、彼は自然靈界を探りて、そこに二つの別種の存在を突きとめたからである。即ち彼は甲を『日界人』と稱へ、乙を『原始靈』と稱へてゐるのである。此等の用語が果して妥當であるか否かは別問題として、その通信内容が、私の日頃研究の結果と殆ど全く符節を合してゐることは事實である。

讀者がすでに御承知の通り、マイヤースの所謂『日界人』とは、太陽をはじめ、其他の恒星の太陽原子内に居住する第一エーテル的存在で、古神道の所謂天津神と稱するものであらう。私はその世界を太陽神界と稱へて居り、その主宰神に坐す天照御大神は人間からいへば、取りも直さず事實上の宇宙神なのである。

次にマイヤースの所謂『原始靈』とは、地球その他諸遊星の内面に居住する第二エーテル的存在で、古神道の所謂國津神といふのは、取りも直さずそれに該當すると思ふ。國津神を地上の物質的存在——原始人と見做すことは、飛んでもない勘違ひで、優れた第六感的能力者には、さうした存在がはつきりと認識され、今日に於てその存否を疑ふ如きは、時代錯誤

も亦甚だしいのである。私はこの世界を太陽神界と區別して、地球神界と稱へて居る。そしてこの世界の主宰神が、取りも直さず皇孫邇々藝命にあらせられるのである。

以上の概説で「日界人」と「原始靈」との區別、並に相互的關係はほど明らかであると思ふが、それにしてもマイヤースが、後者に就きて述べて居る所は、何と思ひ切つて露骨、何と思ひ切つて端的であらう。その用語は至つて簡單だが、その與へる示唆は千萬金にも換へ難きものがある。彼は原始靈を定義して、「地球その他の遊星上に、ただの一度も肉體を有つて發生したことの無い原始的存在」と言つてゐるが、これは恐らく動かし難き好定義といふべきであらう。次に原始靈の形態につきては、「曾て火中に生息したと傳へらるゝ、神話のサラマンダア（火龍）に類した點がないでもない」と説き、更に「彼等はしばしば大蛇の姿を模し、又龍の姿を模する」と述べ、又「龍姿を取れる原始靈達が、陸離たる光焰を放ちつゝ、無限の空間を運行する諸天體の常住者である」と喝破して居る。西洋の心靈家も、とうとうこゝまで突込んだことを述べるかと思ふと、實に感慨無量ではないか！ われ／＼實際的に心靈問題を取扱ふものが、どうあつても無視し得ないものは、實に龍神の存在で、これを否定する位なら、寧ろ自分自身の存在を否定した方がましな位である。されば私として

は、いつも最大の力點を龍神の研究に置き、以て今日に及んでゐるが、從來西洋の心靈研究はなか／＼そこまで深入りせず、専ら歸幽靈ばかり取扱つてゐた。若しそれ日本の神道家だの、學者だのに至りては龍神どころか、人間の死後の存続すら否定し兼ねないのである。この際に當りて、突如としてマイヤースの通信が、堂々として龍神の存在を喝破してゐるのだから、實に耐らなく嬉しいのである。マイヤースの通信は、單にこの一節のみでも、優に恒久的存在の價値があるものと思ふ。

但しマイヤースの通信は日界人と原始靈との關係、又原始靈と地上の人間との關係等につきては、説いて未だ盡さざるものがある。「その所屬の天體生活の最も重要な構成要素」とか、又「類魂は此等の原始靈の經驗を取り入れて、初めて完成を期し得る。」といふ丈では、何やらそこに、隔靴搔痒の憾がある。私としては、この點につきて、既に或る程度まで研究の結果を發表してあるから、讀者は是非それを參酌されたい。

十、言語と宗教

自然靈の世界にありて、思想を傳達するには、聲音と同時に色を用ゐる。就中思想傳達の主要なる媒体は色であつて、文字ではない。で、地上の印刷物に相當するものは、つまり繪畫なのであるが、たゞその繪畫は、到底名狀し難き性質のもので、こゝに詳説の限りでない。それは地上の嚴格なる意味に於ける繪畫と異なり、それからそれへと、けぢめも分かず溶け合ひ、又組み合つてゐる一種の繪畫的表現法なのである。しかもそれには、相當の耐久性があり、幾時代もの保存に堪へるから不思議である。無論そこには書物係りの専門家も居り、何やら特殊の装置を施して、太陽原子の消散を防ぐ方法を講ずる。さうした人達は、恰度地上の圖書館係に相當して居るものと思へばよいであらう。兎に角、彼等の計算能力は驚くべく優れて居り、そして一種の磁氣を用ゐて、適宜の色素を引き寄せ、あくまで原本に忠實なる新繪畫書を製出するのである。無論異常に變動性に富める世界の繪畫であるから、歲月の経過に連れて、多少の變化は免れないが、歴史も、詩歌も、亦その他の記録も、それが精神のこもれる作品であればあるほど、いつまでも

原作者の意念を傳へて亡びないのである。

星辰界の居住者にとりては、彼等の環境が格別不安定とも、又不定形とも感じられない。何となれば彼等自身が、形而上的にも又形而下的にも、驚くべき速度で活動してゐるからである。要するに、すべては比例の問題でしかない。尙こゝで忘れてならないことは、世界がいかに異なり、環境がいかに變つても、宇宙引力の法則に、何の相違もないことである。かるが故に日界人として見れば、自分達がさうした途方もなく、突飛な世界に住んでゐるといふやうな感じは、少しもないのである。

で、基本的原則としては、日界人の生活と、人間のそれとの間に、類似の點が決して少くない。例へばその生存期間中、日界人の魂は決してその體軀を離れて活動することがない。それは恰度人間の魂が、生きてゐる時に、その肉體を離れないのと同様である。異なつてゐるのは、ただ日界人の體軀が間斷なく變化を遂げ、人間の肉體のやうに、殆ど作りつけでないことである。但し前にも述べたやうに迅いといひ、又遅いといひ、それはたゞ比例の問題で、日界人の眼から見れば、彼等は自分の體軀の變化を、格別無常迅速であるとは考へない。恰度人間が自己の緩慢なる肉體の變化を、格別遅いと思はぬのと同様であらう。

自分は星辰界の社會組織につき、又星辰界の居住者の職務につきて、詳しくのべるべき知識を有たない。たゞ自分が確實し得るのは、彼等が地上の人類と同じく客觀、主觀兩様の生活を送りつゝあることである。各種各様の善と惡との争闘の結果、星辰界にも、矢張り熾烈なる情念の發作があり、同様にそこでも亦宗教が、生活の第一義的重要素となつてゐる。星辰界の居住者は、「神の子」の存在を知り、これを自分達の主宰者と仰いでゐる。但し彼等は、地上の人間とは比較にならぬほど豊富な想像と、博大な視野との所有者であるから、人間のやうに、深くは君臣上下の關係にこだはらない。入神した時の彼等は、一路直ちに普通の實在に近づいて、宇宙の創造的精神と冥合せんばかりになつてゐる。が、神祕の奥には更に又神祕がある。いかに彼等が無上の歡喜に浸らうとも、宇宙は依然として一の解かれざる謎であることに變りはない。

さて爰に起つて來る疑問は、人間の宗教と、日界人の宗教とが、どう異なるかの問題であらう。自分の見る所によれば、兩者の最も重要な相違點は、「宇宙的知識と宇宙的信念」の厚薄如何であると思ふ。恒星の居住者達は、すでに人間の第一階段を突破し、統體としての宇宙に就きて、極めて該博なる觀念を有つて居る。つまり地上の同胞に比ぶれば、比較にならぬほど精妙な心身の所有者であるから、彼等はよく造化の機構の偉大性を味讀する能力を有し、苦もなく隠

れたる實在の堂奥に遡り、かくて彼等の信仰、彼等の智慧は、人間のそのやうに不純なる夾雜物を、殆ど混へてゐないのである。

日界人の間にも、勿論惡の要素は存在する。惡とは畢竟不完全を意味し、思ひ違ひを意味し、その結果罪となり、悩みとなる。が、日界人の惡の觀念は、人間のそれよりも、もつと深刻である。自分の觀るところによれば、それはより高き意識の水準を、目指す進出への反逆を意味するらしい。換言すれば、それは生命に對する逆行である。宇宙的には不動の法則があり、従つて一歩々々向上の道を辿る爲めには、全身全靈を打ち込みて、眞と美との追求に當らなければならぬ。これに反するものがとりも直さず惡なのである。

若しも魂の働きの不完全であれば、各自は必然的に過誤に陥り、爲めに意識の低き階段へと引き降される。所謂人類の墮落は、ひとりアダムのみの問題でない。現幽兩界を通じての、一切萬有の間に、今も依然として繰り返さるゝ問題である。すべての魂は、自由選擇の權能を有つてゐる。で、若し各自がその想像力と、信念とに缺陷があれば、彼は向上前進の希望を失ひ、現在の局限されたる生涯に、満足して居ることになるであらう。すべて低き世界ほど、その生活は不自由であり、孤立的なのである。

かくの如くにして、日界人中の相当多数は、恒星界の生涯を終つた後で、一時的の逆戻りをするのである。これはその生活中に、何等かの大自然法則の違反を行ひたる結果、その錯へる内的自我の均衡をとり戻すべく、後退を餘儀なくせらるゝのである。それ等の一部は、確かに地上界の附近にとどまり、蔭から人類その他の監視に當つてゐるやうである。中には又第四界(色彩界)にとどまり、宇宙生活に堪ふるだけの、威力の養成につとめるものもある。が、彼等の大部分は、何れも向上前進の登路を辿り、地上人の所謂死の過程を通過した後、類魂生活の中に入り、以て宇宙の内面機構に與かるべき、大直感能力の獲得につとめる。その理想的境地こそ、とりも直さず意識の第六階段、光明界なのである。

この大準備期につきては、到底之を一言に述べ盡すことはできない。何となれば、意識の第五階段にとどまる間に、経験せねばならぬ事物は、實に千種萬様、殆ど筆舌の盡すところでないからである。そのくはしい説明は、しばらくこれを他日に譲り、たゞこゝで一言したいと思ふのは、それ等の日界人の多数が、一度太陽のやうな自然體に於ける生活を終つた後で、更に他の種類の恒星界に於ける経験を獲得せんとすることである。思ふに彼等は、過去の恒星生活の経験が、あまりにも身にしみてうれしく、更にもつと深刻なる楽しみを味讀せんことを希ふのであ

らう。

さうした魂が、新たに選める恒星の生活は、しばし前の恒星の生活とは、本質的にひどく相違して居り、従つて彼等は、通例多くの新知識に接することになる。例へば太陽のやうに炎々と燃ゆる天體と、死灰の如く冷え切つた恒星とでは、いかに何んでも大いに勝手が異ふのである。こゝに彼等が一度の経験で満足せぬ理由があるのである。思ふに兩者の相違は、幾分地上の人等が遭遇する夜と、晝との相違に該當して居るでもあらう。

(評釋) 高級の靈界人の使用する通信機關が、文字又は言語でなくして、一種の繪畫であるといふことは、他の有力な靈界通信の教ふる所でもある。私自身も、恐らくそんなことであらうと想像してゐる。『それが精神のこもれる作品であればあるほど、いつまでも原作者の意念を傳へて亡びない』は、たしかに至言であると思ふ。

次に自然靈達にとりて、無常迅速なる恒星の生活が、別に目まぐるしいとも、又不安定とも考へられないとあるが、これも當然過ぎるほど當然の事かと思考される。思ふに大自然の根本原則は、何れの世界に於ても同一であり、たゞ振動数の如何によりて大小、高下、遅速、輕重等、千種萬様の生活の變模様が出来る丈のことであらう。その點に於て、マイヤースの

説く所は極めて合理的、常識的であり、何人にも首肯し得る事ばかりである。神祕を神祕として玉手箱に取扱はんとする古代の教示に比して、正に格段の進歩と言つてよからう。マイヤースが『神の子』の實在を説いてゐるのも、まことに愉快である。これにつきての彼の説明は頗る概念的で、その神の子が何であるかはよく判らないが、われ／＼日本民族は、これを日本古典の記録と對照することによりて、そこに多大の暗示を感得せぬ譯には行かぬ。これにつきては、私自身の一つの解釋もあるが、時期尙早と思ふので、モウしばらく沈黙を守ることしよう。

宇宙意識にとめる自然靈の宗教と、物質的觀念に捕はれてゐる人間のそれとの間に、多大の懸隔があるべきは、言ふまでもない話だが、マイヤースが兩者の區別を、宇宙的知識と、宇宙的信念の厚薄淺深如何にあると喝破してゐるのは、たしかに正當である。人間の口にする宇宙は、しば／＼歪曲された、特殊部落式のものでしかない。従つて人間の唱へる宗教、並に宗教心には、まだ／＼大いに訂正増補の必要がある。その點に於てマイヤースの通信はたしかに多くの示唆に富んでゐる。佛教を以て、キリスト教を以て、又神道を以て一つの完成品と心得、過去を謳歌することを知りて、向上前進の何物たるかを知らざるものは、こ

の際大いに反省熟慮してほしいと思ふ。

これを要するに、マイヤースがこゝに説く所は、徹頭徹尾暗示的の價値で持ち切つてゐる。地上生活中の人間には、到底充分に腑に落ちかねることばかりであるが、しかし一讀の後、心の底に何物かゞ力強く残るのは、まことに不思議である。ホンモノとニセモノとの相違は、恐らくさうしたところに存するのであらう。

十一、生命力

前章に於て自分は『生命』だの、『生物』だのといふ用語を使つて居るが、これを人間的の觀念で解釋されては困るのである。一體生物の背後に潛んでゐる動力につきては、現在學者間に、まち／＼の意見が闘はされてゐる。一部の人は、その動力が一種の物理的エネルギー、恰度電氣に近似したものであつて、それがとりも直さず生命であると信じて居る。他の一部の人は、別に一種の非物質的動力、一種の生命力と言つたやうなものがあつて、それが物理的、又は化學的作用の背後に控へてゐるのであると主張する。自分は今更この論争の渦中に入り、地球並に地

球上の無数の生物につきて、その生命力の有無を論じようとは思はない。自分はたゞ天體生活を送りつゝある、『太陽人』の活用するエネルギーが、科學的知識を有する地上の學者達の分析解剖しつゝあるやうな、あんな粗末な形態のエネルギーとは、到底比較し得ないほど、精絶妙なものであることを告げたいのである。序でにこゝで自分は、生命の創造的基本が何であるかを、極度に簡単な一語で道破して見たいと思ふ。それが地球上であらうが、恒星上であらうが、いかなる場合に於ても、生命原理が想像力の一つの中心であることに疑ひはないが、人間の肉體、並に日界人の體軀の背後に存在する靈スピリットと、魂ソウルとの協同作業こそは、これを要約して『大宇宙の想像界と結びつけられたる、小想像界』であると定義し得ると思ふ。われ／＼は、そこにこそ、全大宇宙に瀰漫する、千萬無数の生命に、それ自身の表現を可能ならしむる、神的原理を發見することができる。

(評釋) 人間其他の生物を通じて肉體以外……イヤ寧ろ肉體以上の精妙なエーテル體が存在する事は、學術的にすでに不動の確證が擧げられて居る。従つてマイヤースが、靈スピリットと、魂ソウルとの協同作業こそ、大宇宙の想像界と結ばれたる小想像界であつて、それが生命の基本であると喝破してゐるのは、蓋し何人も否定し難き定説であらう。何となれば、すべて想像ありて

の創造であり、進化であり、又向上であり、ギリ／＼まで煎じつむれば、宇宙の森萬象は羅畢竟この不可思議な感想力——の所産に外ならないからである。

十二、黒い星

空間には無数の黒い星が運行して居る。それ等は遠き昔に、燃焼し盡した太陽の遺物であるが、しかし今も尙ほ崩壊するまでに至らず、無限の空間を通じて、寂びしき旅を續けて居るのである。それ等は肉眼はもとより、いかなる望遠鏡を以てしても、到底視ることはできないが、しかし斷じて假説的の幻影でなく、又單なる殘骸とも考へられない。何となれば、それ等が或る安定性を有し、或る創造の用務に服しつゝあるからである。そしてそこには、人間の知らない一種の知覺を與へられたる存在物が、立派に生活を営みつゝあるのである。

此等の黒い星の居住者達は、その環境の異常なのに準じて、その機能も亦極めて異常不可思議である。しかも彼等は、矢張り類魂中の一部であつて、決してわれ等と全然別種のものではないのである。

有限の理性は、無限の空間に散布されたる天體のあまりにも多く、あまりに偉大なるを見て驚き、且つ呆れ、それ等の世界に個性を有する居住者が存在するなど、は、到底考へ得ないやうに思ふ。が、人間の想像力は、たとへそれが有限であつても、自分の述ぶる所を、必ずしも荒唐無稽の痴人の夢とのみ見做さないであらう。少くともさう考へる事によりてのみ、人間の意義が初めて發生する。われ／＼は、斷じてたゞ地上の同胞のみを同伴として、永遠の旅をつゞくるのみでなく、實に目に見えざるわれ／＼の祖靈、又太陽系の他の諸天體の居住者達とも、立派な道連れなのである。彼等は物質的には、全然われ／＼と別世界の住人である。しかし精神的には、全然われ／＼と同一家族である。

あゝ想像と直感——さうしたものが人間にあればこそ、われ／＼は地上生活につきもの、一時的の苦痛や、悲哀や、紛々たる誤解や、争闘やを排除し、壓倒し得るのである。見よ、自分達の前途、自分達の眞上には、偉大崇嚴なる自由の世界が、自分達の來着を、笑顔を以て麾しないてゐるではないか。人間は斷じて五七十年の短日月に限られた、そんなケチ臭い、そんな貧しい、そんな窮屈な、又そんな惱ましいものではない。人間を縛るものは、實にその厄介千萬な肉體である。肉體があるばかりに、人間は親切にして高邁なる祖靈、その他人間以上の有情うじやうの存在に背き、

かくもせゝこましい割據的生活に悩むのである。

(釋評) さすがのマイヤースも、『黒い星』並にその居住者につきては、單なる概念しか傳へ得ない。そして最後はたゞ詠歎的に理性と、直感との相違を指摘してゐるに過ぎない。靈界通信も、こゝまで來ると、そろ／＼詩歌の領分内に歩み入る傾きがある。

月刊 心靈と人生

毎月一回 一日發行
定價金二十錢送料一錢

□心靈研究と神靈主義の機關として斯界に君臨する唯一の特殊雜誌

□創立以來茲に十有五年内外の心靈事實又これに關する權威ある研究の紹介にかけて正に斯界の權威

昭和十三年十二月廿五日印刷
昭和十三年十二月三十日發行 (定價金參拾五錢)

不許複製

著者 淺野 和 三 郎
右同所

發行者 淺野 多 慶
東京市芝區田村町三ノ五

印刷者 脇 長 男
東京市芝區田村町三ノ五

印刷所 診療社印刷部
橫濱市鶴見區北臺二三六六

發行所 心靈科學研究會出版部
振替東京六三四八二番

東京市麴町區平河町二ノ二三

發賣所 東京 心靈科學協會

電話九段二三九五番
振替東京三七六七七番

代表近刊的參考書

淺野和三郎譯並評釋

四六版クロース製百餘頁
定價 金壹圓 送料九錢

□□ 本書はステーション・モーゼスの自動書記による靈界通信である。
□□ 靈界通信なるものは、靈媒の素質如何により、内容に至大の影響を及ぼす。
□□ モーゼスは學識人格共に申分なく、此の點通信に最適せる第一人者である。
□□ 従つて本通信はたしかに新らしき時代の要求する指導原理を提供してゐる。
□□ 淺野氏の譯筆は晦澁に陥り易き此種文字を平明化し、一讀諒解に達せしむ。

淺野和三郎譯並評釋

永遠の大道

四六版クロース製二百頁
定價 金壹圓參拾錢 送料九錢

□□ 本書はマイヤースの靈界通信を、カンミンズ嬢が自動書記で受取つたもので、
□□ 内容は深遠なる哲學的要素に富み、流石にマイヤースと肯かしめる。
□□ 淺野氏は二十餘年間の苦き體驗により、マイヤースと靈犀相通するところあり、
□□ 従つて其の丁寧懇切なる評釋は、流麗なる譯筆と共に、斷然他の類書の追隨を許さぬ。眞理に生きんとする人士に薦むる所以である。

アーサー・フインドレー著淺野和三郎譯

新時代と新信仰

四六版クロース製三六〇頁
定價 金二圓 送料金十五錢

□□ 本書は心靈科學を基礎とし、主としてキリスト教が如何に不合理であり、
□□ グマだらけの教義であり、時代後れであり、今後の指導原理となすに足らぬ
□□ ものであるかを明かにした。時代後れであり、今後の指導原理となすに足らぬ
□□ 眞理の爲めには破邪が先立つ。此點著者の筆鋒鋭利を極め、正に降魔の劍を
□□ 揮ふの概がある。破邪が先立つ。此點著者の筆鋒鋭利を極め、正に降魔の劍を
□□ 獨りキリスト教のみならず、在來の宗教といふ宗教は、大概似たり寄つたり
□□ である。在來宗教に懐らざる人士は勿論、宗教家と雖も、いつまでも耳を塞
□□ いで居るべきではあるまい。眞理に立脚せる教を求めんとする士の必讀書。

代表參考書

淺野和三郎著

神靈主義

四六版クロース製二二〇頁
定價 一・三〇錢 送料一・二錢

本書は心靈學徒としての著者が十有八年の體驗と思索との總決算である。著者の唱導する神靈主義こそは、實に科學的事實の論理的結論であり、同時に日本精神の世界的擴充である。科學と宗教。道徳と哲學とがいかに渾然としてその中に安往の地を見出してゐるかを見よ。

劍橋大學ワアド學士の靈界通信 (淺野和三郎譯)

死後の世界

四六版クロース製四百餘頁
定價 金一五〇錢 送料 五錢

□□□□ 本書のお蔭で死の彼岸の實状は手に取るやうに判つて來た。
□□□□ 筆は小説以上に面白いが、事實は歴史以上、旅行日記以上に正確である。
□□□□ 苦痛、煩悶、行詰りに喘ぐ現代の日本國民は先づ本書を繙くことだ。
□□□□ 成るべく多く我同胞に頒布したい念願でこの普及版は出された。

劍橋大學ワアド學士の靈界通信 (淺野、柏川共譯)

幽界行脚

四六版クロース製三五〇頁
定價 一・五〇錢 送料 一・二錢

□□□□ 本書は「死後の世界」の姉妹篇として世界の心靈學界に名聲を博せる好著。
□□□□ ワアド學士の靈感の前篇の發表以後いよいよ、鋭さを加へ縮横自在、天下無敵
□□□□ 本書のヒーローであるレックス中尉は歐洲大戰の犠牲となつた人で、その幽
□□□□ 界探検は驚くべき正確である。
□□□□ 現世の兄と他界の弟との間の完全なる交通によりて本書は出來上つた。研究
□□□□ 者には無二の好資料である。

必讀の新刊書

淺野正恭著 (日本精神の淵源)

古事記生命の原理

四六版クロース製 二百二十餘頁
定價 壹圓貳拾錢 送料 十錢

□著者は最近十餘年古事記の研究に没頭し、自然科学を用ひて古事記一貫の原理を探究し、以て日本國存在の意義を闡明せし、我邦古典研究史上斷然新生命を開拓したる近來稀なる名著。
□識者の精讀を希望す。

淺野和三郎著 (増補三版)

心靈講座

四六版クロース製 六百頁
特價 金參圓 送料 十八錢

〔本講座の特色〕

- (一) 講述の筆が懇切且つ直截で親しく著者の口から講話を聞く感がある事
 - (二) 材料が正確且つ新規で、現代心靈界の粹を抜いて居ること
 - (三) 着眼高邁、論斷公平で、何人をも首肯せしむること
 - (四) 死後の個性の存続、顯幽交通の可能等、人生最重要の問題が徹底的に究明されて居ること。
- 以上の四大特色を以て本書は斯界に測歩し、既に多くの人に光明を與へ、煩悶を除かしめた、文字通りの現代の國民教科書である。

必讀の新刊書

淺野和三郎著

心靈讀本

四六版クロース製 二百六十頁
定價 壹圓五拾錢 送料 十二錢

- 本書は偶ま著者の絶筆となれるものにして、例の平明流麗なる行文、圓熟せる筆致を以て、難解なる人生の哲理を闡明し、容易に理解に達せしむ。
- 本書は概説並に五篇より成り、心靈研究の起源と現状、その種々相、靈媒、本邦並に歐米に於ける著者の貴き體驗、其の中には日露戰爭海軍名參謀の秘話も收められてある。尙人間と環境、精神統一の理論と方法等が詳述されてある。
- 著者は國難を前にし、深憂を懷いて逝いた。著者は國難の克服を大精神の長養に求めんとして此の著を成した。

淺野和三郎著 (我邦に於ける純なる靈界通信)

小櫻姫物語

四六版クロース製 約三百頁
定價 壹圓五拾錢 送料 十二錢

- 本書は純なる靈界通信にして、通信者は小櫻姫、受信者はT夫人、筆録者は淺野氏。足掛け八年を要したる苦心の産物である。
- 小櫻姫とは四百餘年前、戰國時代の末期に於て、相州三浦城の名花と謳はれた一女性で、歸幽後その靈的天分を磨き、現在T夫人の守護靈として大活躍をつとめて居る。
- 本書の内容は小櫻姫の生前死後に互る偽らざる告白で、事實は小説よりも奇それが優雅な文字を以て盛られ、正に一幅の繪巻物を展開してゐる。

心 靈 文 庫

- 第一篇 心靈研究之稜口葉附
- 第二篇 幽魂問答
- 第三篇 續幽魂問答口葉附
附錄「長南年惠物語」
- 第四篇 人は死せず(上)
- 第五篇 人は死せず(下)
- 第六篇 ステツドの通信
- 第七篇 新樹の通信(其一)
- 第八篇 新樹の通信(其二)
(本篇に限り三五錢)

必 讀 書

- 淺野和三郎編 岩間山人と三尺坊〇・八五錢
送料九錢
- 淺野和三郎著 照魔鏡金十錢
送料三錢
- 國家の守護神金五錢
送料三錢
- 天才養成自己發揮の秘訣金十錢
送料三錢
- 心霊から觀たる世界の動き金十錢
送料三錢
- 日本民族の使命と信仰金八錢
送料三錢

心 靈 寫 眞

第一輯 每輯 四葉
第二輯 每輯 五十錢
送料 三錢

直接談話のレコード

三枚六面一組 定價金五圓
送料本會負擔
總井靈媒は日本有数の直接談話靈媒で、遂に音器吹込みに成功した。右現象に關する解説は淺野氏によりてレコード二面に收められてゐる

淺野 和 三 郎 著

歐 米 心 靈 行 脚 錄

定價 金一圓三〇錢
送料 金九錢

□今ではもう四十年もの昔になるが、淺野氏はアーピングのスケッチ・ブックの譯を以て、當時の讀書子間に文名を轟はれたものである。

□同氏はその後心靈の研究に没頭して、實驗と理論の確立に畢生の力を傾け、之に關する著書亦鮮しとせない。

□同氏の平明流麗なる筆致は、此の難問題に對してすら、能く人をしてその核心を把握せしむることに成功したのである。

□此の行脚錄は、軽い氣分で筆を執り、昔ながらの淺野氏を魅らせ、更に枯淡の趣きさへ加はりて、之を單なる文學作品としても充分價值あるのみならず、其の内容には不朽に傳ふべきものがあり、漫談的旅行記などは斷然同日の談ではない。

□附錄として世界神靈大會の狀況、歐米の神靈熱等を載す。彼を知り己を知るは獨り兵家のみならず、孤立獨善に陥らざらんとせば、故に又世界をも知らねばならぬ。而して是れ本書以外斷じて他に求め得ざるもの。

淺野和三郎著

心靈學より日本神道を観る

四六版美装二二〇頁
定價金壹圓
送料金九錢

- 本書の目次は、神社と祈願、祈願の意義、日本神靈主義と祭祀、再生説と古神道、國家の守護神、日本民族の使命と信仰、天孫降臨の神勅、信仰の對象、メーソン氏の神道觀につきて、靈媒の話、靈媒の取扱方につきて、筋の通らぬお國自慢、審神者の悲喜劇、神靈主義と神社問題、不徹底な祖神崇敬の十五篇より成る。
- 現下の難局は國民精神の作興、國家意識の確認によるに非ざれば、到底打開されない。而して國民精神の作興も、國家意識の確認も、日本神國としては、神の道を明かにするより他に途がない。
- 神の道は廣大無邊なるを以て、動もすれば揣摩臆測に墮し易い。之が爲めには是非共事實を基礎とせねばならぬ。單なる事實にのみ着眼するときは、往々迷路に陥る。事實と理論とは、それ故に常に併行せねばならぬ。
- 事實と理論と併行しながら、しかも神の道に到達し得るもの、心靈學を描いて、他に有ることなしと斷言するに憚らぬ。
- 本書收むるところの各篇、相互關聯を保ちつゝ、心靈學見識の下に神の道を説いたもので、日本の眞の神の道を闡明し得ることに於て、恐らく類書を絶つ。
- 現下時局重大、之に處する所以の道、日本の神の道を明かにするより他に途なしとせば、本書の出でたる、蓋し偶然ではない。敢て之を世に推獎する所以である。

▲東京心靈科學協會々則（要旨）

- 一、本會は會員組織の下に心靈現象に關する諸般の學術的研究を行ふ。
- 一、本會は一切の宗教、主義、學說等に超越す。
- 一、本會は左の事業を行ふ。
 - (イ) 毎月一回講演會又は會員座談會開催
 - (ロ) 心靈相談所に於ける招靈及各種の靈的調査
 - (ハ) 精神統一會に於ける統一の實修其他
- 一、會員を左の二種とす。
 - (イ) 贊助會員 (ロ) 正會員
- 一、贊助會員は本會の事業を翼賛し特に援助を與ふるものとす。
- 一、正會員は年額金拾圓を前納す。但し年二回に分納することを得。
- 一、本會員の特權は左の如し。
 - (イ) 月刊雜誌「心靈と人生」の無代配布
 - (ロ) 心靈相談所優待券十枚交付
 - (ハ) 心靈上の講演實驗等に對する特權
 - (ニ) 精神統一實修の特權 其他

東京市麴町區富士見町三ノ三

東京心靈科學協會

電話九段一六九五番
振替東京三七六七七番

387
532

終

7
2